

えのき が いと ひろ はた あら い みなみ
榎垣外・広畑・新井南
遺跡発掘調査報告書
(概報)

平成2年度 榎垣外遺跡ほか発掘調査報告書



長野県岡谷市教育委員会

序

平成2年度の榎垣外遺跡ほか、岡谷市内遺跡の試掘・確認調査及び発掘調査の報告書（概報）を刊行することになりました。

近年は個人住宅建設に関連した遺跡範囲内の土木工事がとくに増加しており、本年の調査件数も34件のほりました。今年度の調査では、広畑遺跡から縄文時代中期の住居跡9棟が検出され、榎垣外遺跡においては掘立柱建物跡の他、縄文時代中期中葉の顔面把手付深鉢形土器が出土、また、新井南遺跡からは古墳時代住居跡が見つかるなど、多くの貴重な遺構、遺物が発掘されました。これら貴重な文化遺産を大切にしていかなければならないと同時に、この報告書が今後学術文化の向上に活用されることを願っております。

今年度の調査にあたり、土地所有者各位、工事関係者の方々、そして調査地に隣接した多くの皆様のご好意、ご協力で御礼申し上げます。また、発掘に携わっていただいた皆さんには、炎暑、厳寒の中を御苦勞いただき感謝申し上げます。

平成3年3月26日

岡谷市教育委員会

教育長 齋藤 保人

例 言

1. 本報告書は、平成2年度榎垣外遺跡ほか岡谷市内遺跡試掘・確認調査及び発掘調査の報告書（概報）である。
2. 調査は、国および県から補助金交付を受けた岡谷市教育委員会が、平成2年4月18日から平成3年3月26日にかけて実施した。整理作業は主に12月～1月に行ったが出土品は十分な整理が終了していないため、概要の掲載にとどめてある。
3. 出土遺物、記録図面、写真等の資料はすべて岡谷市教育委員会で保管している。

目 次

序	
目次	
1. 平成2年度調査の概要	1
2. 広畑遺跡	3
3. 榎垣外遺跡蟠纏家地籍	8
4. 新井南遺跡	10
5. 榎垣外遺跡金山地籍	11
6. 榎垣外遺跡下片間町地籍	12

1. 平成2年度試掘・確認調査及び発掘調査の概要

平成2年度、岡谷市内において周知の遺跡に農地転用、公共事業等の開発行為が計画・実施され、市教育委員会が何らかの対応を実施した件数は38件をこえ、そのうち、試掘・確認調査は34件に及んでいる。そして、それからさらに緊急発掘したケースは5件3遺跡である。

本年度の調査の特徴は、ここ数年続いている傾向に同じで、長地方面（湖北地区沖積地）の平坦部に調査が集中していることである。そのために、縄文時代の遺構・遺物は広畑遺跡のように集落の密集した部分の調査となった例を除いては比較的少ない数であり、代わって奈良～平安時代の遺構・遺物が特に多い結果となった。

調査の中で注目すべきものは、榎垣外遺跡の成果であろう。官衙跡を北東に置き、2km四方に及ぶ範囲に広がる遺跡で、今年度はこの榎塚地籍において、以前に官衙跡ではないかと見られる掘立柱建物跡群が発見された調査地の西側に隣接する箇所が発掘されたことである。わずかな面積の調査でも確実に継続することにより、広い範囲の遺構群全体の概観を把握して、榎垣外遺跡の性格を確定できるであろう。

なお、緊急発掘調査については本文中にその概要を記したが、緊急発掘調査にいらなかった箇所については以下の表によって詳細は省略した。

表1 平成2年度試掘・確認調査一覧表

遺跡名	所在地	調査の理由	調査期間	主な遺構	遺構・遺物の時代他
1 郷田	郷田二丁目500-1	駐車場建設	4.18		縄文・平安
2 榎垣外(山道端地籍)	長地字山道端2317-1他	工場建設	4.18~5.17		平安
3 榎垣外(山道端地籍)	長地字山道端2317-7他	住宅建設	4.18~5.17	平住1小竪穴1	縄文・平安
4 榎垣外(西原地籍)	長地字西原4788-1	共同住宅建設	4.24~4.25		平安
5 梨久保	長地字上の平4574-1他	駐車場建設	4.25~5.12		縄文
6 扇平	長地字丸山5844-1他	住宅建設	4.25~6.8		縄文
7 広畑	川岸山神上1549-1他	住宅建設	4.26~8.5	縄住9小竪穴6	縄文 緊急発掘
8 榎垣外(小田野沙上地籍)	長地字小田野沙上3102-8	駐車場建設	5.17~5.18		平安
9 原沢	川岸東四丁目7351-1	駐車場建設	6.8~6.11		縄文
10 安沢I	漆安沢口向1023-1	庭木植栽	6.14~6.19	縄住1	縄文
11 新井北	湊五丁目248-4	住宅建設	6.19		縄文
12 榎垣外(古屋敷地籍)	長地字古屋敷4108-1	J場建設	6.27		平安
13 上屋敷(辻通地籍)	長地字辻通5493-5他	住宅建設	6.27~6.30		縄文
14 上屋敷(上屋敷地籍)	長地字上屋敷5271-1	住宅建設	6.27~6.30		縄文
15 柳海途	柳海途1435-1他	工場建設	7.4~7.5		縄文
16 東町中	長地字下村3290-1他	住宅建設	7.18~7.19		弥生
17 榎垣外(榎塚地籍)	長地字榎塚3685-14他	住宅建設	7.30~12.28	掘立4小竪穴1	縄文・平安 緊急発掘
18 榎垣外(鎮守上地籍)	長地字鎮守上2950-6	駐車場建設	9.25~9.27		平安
19 榎垣外(榎海戸地籍)	長地字榎海戸4001-3	共同住宅建設	9.10		平安
20 新井南	湊5丁目305-1他	住宅建設	10.12~11.1	古住1	緊急発掘
21 榎垣外(金山地籍)	長地字金山2934-4	駐車場建設	10.17~11.2	平住1	緊急発掘
22 上向(上ノ原地籍)	字上ノ原104-2	駐車場建設	10.31~11.1		縄文
23 榎垣外(金山地籍)	長地字金山2927	倉庫建設	11.2~11.5		平安
24 上向(大橋向地籍)	長地字大橋向6196-1	住宅建設	11.27		縄文
25 上屋敷(丸山辻地籍)	長地字丸山辻5510-1	駐車場建設	12.1~12.5		縄文
26 榎垣外(下片岡町地籍)	長地字下片岡町2373-3	倉庫建設	12.3~12.23	平住3 縄住1	縄文・平安 緊急発掘
27 神明平	川岸字大沢口3564-イ他	墓地造成	12.15~12.28		縄文
28 榎垣外(向田地籍)	長地字向田4713-1	駐車場建設	12.19~12.20		縄文
29 榎垣外(榎海戸地籍)	長地字榎海戸4035他	倉庫建設	1.16~3.4		平安
30 榎垣外(榎海戸地籍)	長地字榎海戸4069-1他	住宅建設	2.27~3.4		平安
31 新井南	湊5丁目394-1他	住宅建設	3.4~3.6		縄文
32 長沙門堂下	川岸西2丁目5128	倉庫建設	3.16~3.26		縄文
33 扇平	長地字山ノ神前5853-1	資材置場	3.16~3.26		縄文
34 榎垣外(栗木海戸地籍)	長地字栗木海戸3666-1	住宅建設	3.16~3.26		平安



第1図 試掘・確認調査地点(番号は表1の一覧表に同じ)

2. 広畑遺跡

1. 発掘調査の場所 岡谷市川岸山神上1549-1他
2. 土地の所有者 高橋 勝 高橋 英雄
3. 発掘調査の期間 平成2年4月26日～8月5日
4. 発掘調査の目的・原因 住宅建設
5. 調査面積 119.5㎡
6. 発見された遺構 縄文時代中期住居跡9棟 小竪穴5基

1号住居跡 調査区南端に検出された住居跡で、畑の耕作面から深さ約120cmの所から床面が検出された最も低い位置にある住居跡である。トレンチの段階ではあまりにも深く、急傾斜地であるため遺構があるとは考えにくかった。しかし、かなり深いところからも土器片石片が多く出土し土層の中にも炭化粒子が多く含まれるため精査したところ床面を検出することができた。調査できたのは全体の北側半分ほどであるが、平面形は、ほぼ円形で直径約5mくらいと推定される。壁の高さは北側で約20cmほどあり、周溝は検出されなかった。床面は炉跡より南側に2～2.5cmの厚さを持つ堅い床がある。暗褐色土の覆土には炭化粒子が多く含まれていたが、床面にも、炉跡周辺を中心となく炭化粒子が散乱していた。

中央よりやや北側と思われる所に、厚さ3～4cmほどの平石11枚を敷き、2個の凹石を使った石囲炉がある。平石は床面にわずかに埋め込まれており固定されている。炉の掘り込みは平石の上面から約18cmくらいである。さらに炉の中央には、直径12cmの小型の土器が底部を欠いて埋められていた。焼土はあまりなく、固まりとして部分的に検出された程度であった。炉石の内側には黒色のタール状の物質がこびりついており、何らかの特別な利用が行われていたと推測される。

2号住居跡 畑の耕作面から深さ約140cmの所に床面が検出された住居跡である。1号住居跡を発見してあまりにも傾斜が激しいので全体の傾きを知るためにサブトレンチを入れたところ、床面と壁を確認し2号住居跡の発見となった。暗褐色土で炭化粒子を多く含む覆土が厚く堆積しており、床面よりやや高い位置からも焼土の固まりが検出されている。平面形は直径5.5mほどの円形の住居跡であると推定されるが、傾斜がかなり大きいため住居跡の南半分は検出されず、調査できたのは全体の北側半分だけである。その北側半分の壁は高さ63cmもあり、壁面には40個を超える垂木の跡が外側に向かって斜めに残っている。垂木痕跡の深さは一定してはいないが10～15cmくらいが多い。周溝は、はっきりしたものはなく北側の壁下に僅かに溝状のものがうかがわれるが、部分的なものであり全周はしない。床面はほぼ全面堅い叩きのある床と思われるが、中央部はそれほど堅くない。北側の壁下の辺りはローム層を掘り込んでいるため、特に堅い床である。また、この辺りは床面が2枚あり、建て直しか、拡張を行った形跡がある。柱穴は、新しい床面から5本検出され、古い



第2図 1号住居跡



第3図 1号住居跡炉石



第4図 1号住居跡床上の土器(右)高さ17cm
炉内土器(左)高さ11.5cm



第5図 2号住居跡

床面からは4本検出された。この他に柱穴よりやや大きな小竅穴が4基ある。

住居跡の中央よりやや南側に大きな焼土の固まりが2箇所あり、そのうち南側のおおきな固まりが炉跡と思われるが、住居跡全体から見ると南に寄りすぎているように見える。焼土は5～8cmと厚く、長期に渡って使用されていたことが窺われる。

住居跡南側の推定線より南にも焼土の固まりが検出され、あるいはここまで住居跡が広がるのではと思われたが床面が検出されず、この焼土は竅穴覆土を示すものであるか不明である。

3号住居跡 サブトレンチによって発見された2号住居跡を調査するために褐色土を掘り進めたところ、わずかながら色の違いが認められ、また遺物の出土がこれを境に極端に多いことから3号住居跡の発見となった。平面形は直径約6mくらいの円形の住居跡であると推定される。やはり傾斜が激しいため住居跡の南側半分は残っておらず、北側半分だけの調査となった。畑の耕作面から約50cmの所に床面があるが、堅い床面は住居跡の中央からやや北側の辺りまで、壁際には顕著な床面は検出されなかった。北側の壁も10～15cmくらいの立ち上がりしかないため、北壁全体は検出できなかった。炉も住居跡と同じく、ちょうど南半分が削られていた。炉石には1号住居跡と同じ様に厚さ3～4cmの平石が使われている。現存する石は北側の3枚の平石だけである。炉の掘り込みは平石の上面から10cmくらいで1号住居跡よりやや浅く、炉内には土器の埋め込みは無かった。しかし南半分が削れているため本来1号住居跡同様、土器が埋設されていた可能性もある。炉石には1号住居跡のようなタール状の黒色の付着物は無かった。炉の位置はおそらく住居跡の中央よりやや北側にあるものと推定される。

4号住居跡 調査区北側の壁を精査しているときに、わずかな面積ではあるが堅い床面と、やはり南側半分が崩れている石囲炉が検出された。炉石は、やはり南側半分は崩れているため検出されず、北側には4個の炉石が残っただけである。残存状態から見て、1・3号住居跡とは異なった方形の石囲炉であることがわかるが、全体の形状は不明である。

5号住居跡 3号住居跡の床面を剥ぎ、さらに掘り進むと暗褐色の落ち込みが扇型に検出された。平面形は直径5.4mくらいの円形住居跡と思われるが、調査区内の検出は全体の約半分ほどであるため、正確には判らない。床面は畑の耕作面から100cmくらいの所にあり、住居跡の中央部に堅い叩き面があるが、その範囲は不定型である。壁際になるほど軟弱な床になり周溝はない。壁は北側の壁に限り比較的残りがよく、約60cmの立ち上がりを残す。炉跡は調査区外になるものと思われる検出されなかった。

6・9号住居跡 平面形は楕円形で長径約6mと推定され、覆土は暗褐色土で炭化粒子を多く含んでいる。やはり住居跡の南側は崩れてしまい北側半分だけの調査になった。北壁の高さは25cmほどで地山を掘り込んで



第6図 3号住居跡



第7図 3号住居跡出土土器高さ20cm



第8図 4号住居跡



第9図 5号住居跡

いるため明確に検出されたが、壁柱穴等の痕跡は検出されなかった。9号住居跡を切っているため東側の壁は検出しにくい。立ち上がりの痕跡は見つけることができた。畑の耕作面から約100cmの所にある床面は北壁に近いほど堅い貼り床が残っていた。この貼り床を剥がすとその下から古い床面が検出され、速で直しが拡張が行われたことが判明した。壁跡を精査したが周溝は検出されなかった。柱穴は新しい床面で8基、古い床面で4基検出されたが、おそらくこの住居跡に切られている9号住居跡の柱穴も含まれているものと思われる。炉跡は石囲炉が2基検出され、1号炉は8個の石を使った円形の石囲炉である。このうち5個はやや丸味のある石を使っている。掘り込みは炉石の上面から12cmくらいである。2号炉は平らな四角な石を使った方形の石囲炉で8個の石を使っている。ただし南側に石の抜けたような所があり本来は9個の石を使ったものである可能性がある。掘り込みは炉石の上面から12cm位の所に火床面があり、全体に赤褐色であり火を受けた様子はない。

今回の調査で最も出土遺物が多いのが6号住居跡であり、その大半が覆土上層（所謂逆三角堆土）からの出土である。住居跡のほぼ中央で房個体ほどの土器が30個体を越え、壊れた石皿、石釜等の石器類が褐色土や礫に混ざって床面から覆土を一層挟んで約75cmの厚さで堆積していた。床面につぶれていた土器を除いては、北壁から約1mの範囲には一括土器はなく、明らかに逆三角堆土の中にある遺物であることの裏付けにもなる。これとは別に覆土下層（所謂三角堆土）から出土した土器や石器もあり、出土した層位によって土器を分類することができる。

9号住居跡は、そのほとんどを6号住居跡に切られており、わずかに三日月形に残った床面と東壁の一部が検出されただけである。

7号住居跡 6号住居跡検出のため褐色土を掘り下げると多くの遺物が出土し、わずかな範囲であるが貼り床が検出された。住居跡であると思われるが、壁となる立ち上がりや炉跡は検出されなかった。平面形は不明である。



第13図 5号住居跡黒耀石細片出土状態



第10図 6号住居跡床上遺物出土状態



第11図 6号住居覆土上層遺物出土状態



第12図 6号住居跡覆土上層遺物出土状態



第14図 6号住居跡出土土器高さ右21cm左11cm

8号住居跡 平面形は長径約4mと推定される。住居跡のほとんどが6・9号住居跡に壊されているため柱穴は深さ80cmほどの穴が1基しか検出されなかった。床面は地山を掘り込んでいるため検出が容易であったがかなり傾斜しており、鍋底状の床面であったことが推測される。壁際と住居跡の中央とでは床面のレベル差が20cmほどある。壁は一番高いところで20cmほどの立ち上がりが残っていた。炉跡は9号住居跡に壊されてしまっているのか、検出されなかった。

小竪穴 今回の調査では5基の小竪穴が検出された。この内5基は8号住居跡の壁際に検出されており、小竪穴群の中に割り込むように8号住居跡が作られたものと思われる。残念ながら小竪穴からの遺物の出土が無いため時期決定に至らない。

1Pは長径約2.2m深さ1.2mの袋状のピットである。北側の最も張り出しているところは上端より22cmの広がりをもつ。基底部には14個の小さな穴があいている。

7、出土した遺物 縄文土器50 石鏃34 石錐5 石匙13 打製石斧84 磨製石斧7 凹石41 敲石5 石皿3 不定型石器4 石製円盤2 土製円盤2 台石1 蜂の巣石1

2・4・5・7・9号住居跡からは復原可能な土器の出土はないが、1・3・6・8号住居跡からは復原可能な土器が出土している。特に6号住居跡からは多く遺物が出土しているが、そのほとんどが床面より高い位置からの出土であり、投げ込みによる遺物の堆積と思われる。その他、明らかに蛇の頭をデザインしたと思われる把手や、8号住居跡のピットからは土器全体が赤色を帯び、特に底にベンガラがこびりついている小型の土器が発見された。おそらくベンガラを入れてあったと思われるものなど貴重な出土品があった。また他の遺跡の石器組成に比べ、打製石斧が飛び抜けて多く出土していること、3号住居跡床直上において黒曜石のフレイクと共に5mm以下の黒曜石細片が1箇所から集中して出土したこと、6号住居跡を主に9点のチャート質の丸い石が出土したことなどが特筆されようか。さらに6号住居跡P5内からは18個の黒曜石原石がまとまって発見され、黒曜石を貯蔵していた穴ではないかと推測されたことも、当地方の特徴的な事柄として記しておく。

第15図 広畑遺跡出土石器 石鏃・石匙・打製石斧・磨製石斧



第16図 6号住居跡出土土器



高さ 52 cm



高さ 48 cm



高さ 24.5 cm



高さ 22.5 cm



高さ 38.5 cm



高さ 26.5 cm



第17図 8号住居跡ベンガラの入った小型土器



第18図 1P袋状小壁穴



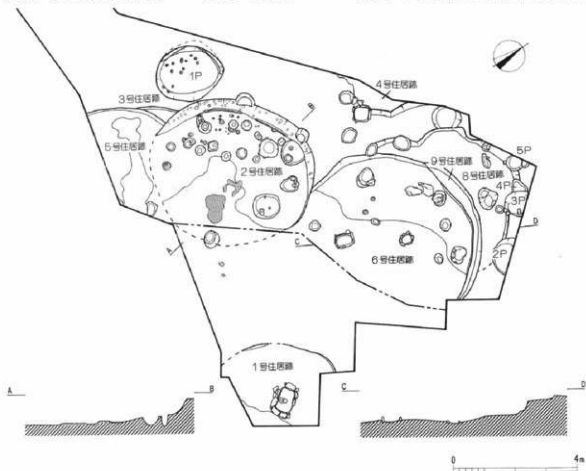
第19図 6号住居跡黒曜石貯蔵穴



第20図 蛇体把手



第21図 8号住居跡出土土器、高さ右35.5cm左12cm



第22図 広畑遺跡遺構全体図 (1:120)

3. 榎垣外遺跡蟻塚地籍

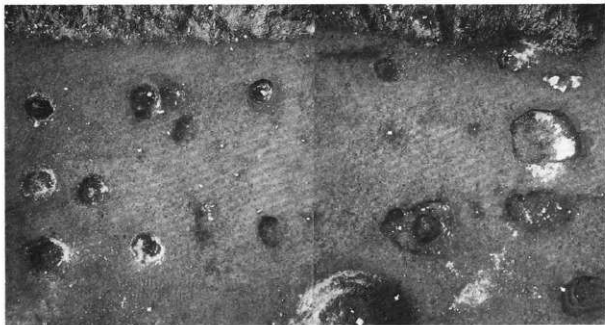
1. 発掘調査の場所 岡谷市長地字蟻塚3685-14 他
2. 土地の所有者 佐藤 博 和田 平八郎 林 義明 山本 末広
桑原 健二 熊沢 丈太郎
3. 発掘調査の期間 平成2年 7月30日～12月28日
4. 発掘調査の目的・原因 住宅建設
5. 調査面積 1056.4㎡
6. 発見された遺構 平安時代掘立柱建物跡4棟
縄文時代小竪穴1基

掘立柱建物跡 今回の調査では掘立柱建物跡が4棟発見されたが、その内1棟は2×3間の倉庫跡と思われる。柱穴の基底部のレベルはそれぞれの穴によって異なり、またいくつかの柱穴の基底部で柱痕跡直下と思われる部分に堅くしまった箇所がある。柱穴の覆土には石が多く含まれていたが、特に意図的に柱の回りに詰められた状態の石は検出されなかった。この他に、以前の調査で一部発見されていた建物跡の続きが完全に検出され2×5間の建物跡であることが確定した。新たに発見された建物跡では、倉庫跡ではなく2×4間の建物跡が1棟、さらに南側に調査区外へ延びているため正確な大きさが判らないもので2×3間以上のものと考えられる建物跡が1棟検出された。この建物跡の柱穴は他のものに比べると深さ平面形ともに大きく、建物そのものが大きかったことが推定される。掘り方を見ると不定型な所があり、一度建て直しをしているか、あるいは柱を抜き取った形跡が認められる。

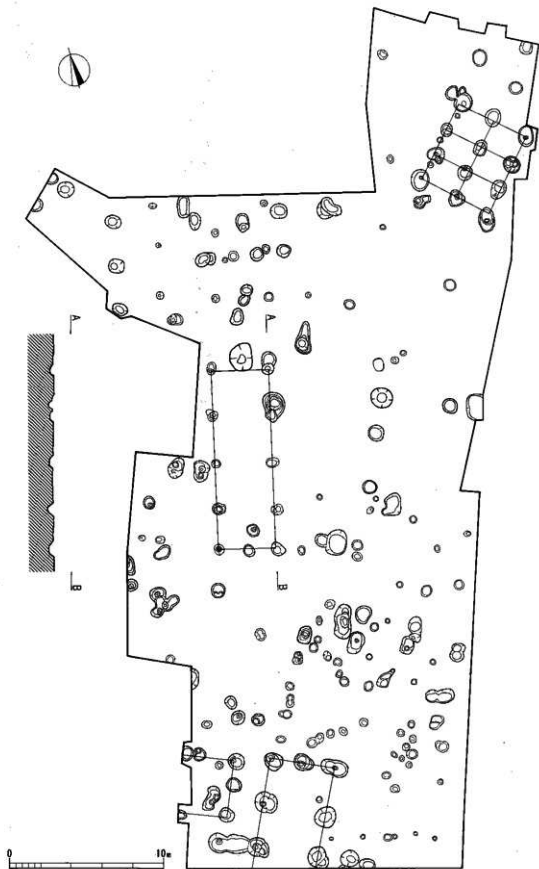
縄文時代小竪穴は深さ約110cmで縄文土器瓦个体が覆土上層から出土している。晩期最末期の土器である。

7. 出土した遺物 縄文土器1 凹石1 打製石斧5 石鎌8 竈の口1 古銭1 土器片石片2箱

竪穴式の住居跡が無く、また畑の耕作などにより当時の生活面が壊されているため遺物の出土は少ない。柱穴から竈の口が出土したほか須恵器大型甕破片が出土し、褐色土層から大型の打製石斧片が出土しているほか、黒曜石製の石鎌も比較的多く出土している。以前隣接する畑を調査した時に弥生時代の小竪穴が検出されており、この付近に弥生時代の集落が存在する可能性もある。今回出土した大型の打製石斧はこれに伴出するものとなるかもしれない。



第23図 掘立柱建物跡



第24圖 鑄銅深地箱遺構全体圖 (1:240)

4. 新井南遺跡

1. 発掘調査の場所 岡谷市湊5丁目305-1 他
2. 土地の所有者 松澤 克久
3. 発掘調査の期間 平成2年10月12日～11月1日
4. 発掘調査の目的・原因 住宅建設
5. 調査面積 52㎡
6. 発見された遺構 古墳時代中期住居跡1棟



第25図 1号住居跡



第26図 小竪穴 内傾斜口縁環出土状態

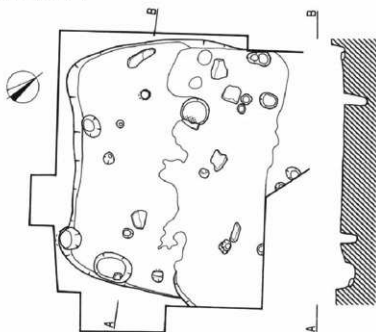
1号住居跡 平面形は南北約5.5m、東側は地形が傾斜しているため崩れており壁は西側だけが検出され床は一部分だけの検出となった。西側の壁は40cmほども残っている所もあるが、その下からは周溝は検出されてはいない。床は全体に固く、特に住居跡の中央から東側に近い所ほど固くて、貼り床状の叩き面が顕著である。しかし部分的に畑の耕作による攪乱がいくつもあり、床面がはっきりしない箇所もある。柱穴は7本検出され、ほかに浅い穴が数基検出されている。住居跡の南隅に長径約80cm深さ約30cmほどの小竪穴がある。

7. 出土した遺物 土師器甕1 土師器内傾斜口縁環1 紡錘車1 土器片石片1箱

住居跡全体に遺物が少ないが、住居南隅の小竪穴から一部欠損しているもののほぼ完成品の土師器内傾斜口縁環が出土した。これは古墳時代中期（長野県史土師器編年Ⅲ期）5世紀前半期のもものと推定される。表裏の整形は雑で、ヘラ研磨がなされず、また、外面はくびれが不明瞭なもの、内面頸部は明確な屈曲を示すため埴の最終末のものであるとも考えられるが、類例が少ないため明確ではない。



第27図 土師器内傾斜口縁環 高さ6.5cm



第28図 1号住居跡平面図 (1:80)

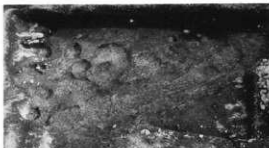
5. 覆垣外遺跡金山地籍

1. 発掘調査の場所 岡谷市長地字金山2934-4他
2. 土地の所有者 八幡 正男
3. 発掘調査の期間 平成2年10月17日～11月2日
4. 発掘調査の目的・原因 駐車場建設
5. 調査面積 81.2㎡
6. 発見された遺構 平安時代住居跡1棟

調査区東端から検出された住居跡で、住居跡の北東から南西に対角線で半分だけの調査ができた。平面形は東西約7m南北約7.3mの方形の住居跡である。覆土は黒褐色で小石を多く含む堅く締まった土層である。壁の残存は南西隅で約80cm北西で20cmである。床面は住居跡の西側を主にしてピットが幾つも重なっていた。ピットの中の土は褐色土で多くのカーボンを含んでおり、また多くの焼土を含むものもある。住居が使用されていた期間において何回も掘ったり、埋め戻したりを繰り返していた様子がうかがわれる。そのピット群から西側には一段高い床面があり、テラス状に2段になっているが、北側の壁を見ると切り合いを思わせる掘り込みがあるため2軒の住居跡が重複していた可能性もある。カマドは北壁のほぼ中央に位置すると思われるが、袖、天井部はすでに崩れてしまい火床面付近から土師器甕破片が数点出土しただけである。このカマドのすぐ東側に長さ1mの大きな石が2個と、その他4個の石が、火を受けてボロボロになった状態で検出された。石の表面には黒いすすのような物が付着している。

7. 出土した遺物 土師器環3 土師器甕2 須恵器環5 須恵器甕1 刀子3 鉄滓4 輪の口2 土器片石片2箱

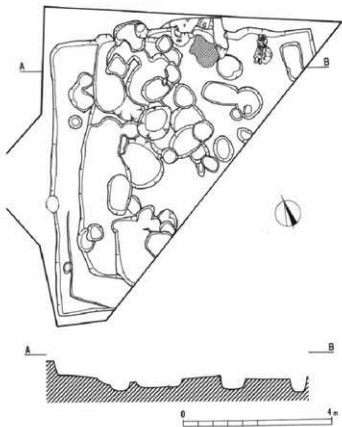
住居跡の床面より30cm高い位置から須恵器甕が出土したが、口縁部は欠けており底部も欠損している。床面からやや高い位置にあるが、この住居跡に伴う遺物であろう。土師器甕はやや小型でカマドの中から出土した。カマドの右側にある石組付近からは輪の口が出土した。石が異常に焼けていることなども考え合わせて、鍛冶屋ではないかとの推測もできる。住居跡覆土掘り下げの段階ではほとんど破片ばかりであるが、刀子3点が出土した。床面のピット群からは鉄滓や須恵器環の底部、土師器甕破片等が出土しているが、その多くが焼土粒子や炭化粒子を含んだ覆土の中からの出土である。



第29図 1号住居跡



第30図 須恵器甕出土状態



第31図 1号住居跡平面図(1:100)

6. 覆垣外遺跡下片間町地籍

1. 発掘調査の場所 岡谷市長地地下片間町2373-3
2. 土地の所有者 並木 志げ子
3. 発掘調査の期間 平成2年12月3日～12月23日
4. 発掘調査の目的・原因 倉庫建設
5. 調査面積 180.6㎡
6. 発見された遺構 平安時代住居跡3棟 掘立柱穴3基
縄文時代中期住居跡1棟

1・4号住居跡 調査区西側から発見された住居跡で、平安時代初期の住居跡と思われる。住居跡のほとんどが調査区外に延びているため、調査できたのは東壁際だけであったが、1号住居跡は幸いなことにカマドが東カマドであったため多くの遺物とカマドの検出をおこなうことができた。平面形は南北約8mを計るが、北壁の角が検出できずまだ北へ延びる可能性があり、一辺9mくらいの大きな方形の住居跡になるとと思われる。壁は約30cm残っていた。カマドは天井が崩れ、袖もほとんど壊れていた。火床面の厚さは4cmある。床面はカマド付近がかなり踏み固められているが、それ以外は特に固めた様子はない。4号住居跡は1号住居跡に切られている。西側、南側にさらに延びる住居跡であるが今回の調査区からは東壁の一部を調査できただけである。床面は1号住居跡より高いため覆土が薄い、須恵器環底部が出土している。

2号住居跡 平面形は東西約4m南北約4mの方形の住居跡である。平安時代の住居跡であると思われるが、掘り込みが浅く、覆土が薄いため遺物は少なく時期決定となる遺物に欠ける。カマドは北カマドであるが、やや東に寄っておりほとんど原形を留めていない。カマドに使われていたであろうと思われる石が幾つか検出されただけであり、焼土はほとんどなく火床面は確認できなかった。住居跡の中央になるほど床面は堅く、ほぼ中央に平らな面を床面まで埋め込んだ石が有り、特にこの周辺が堅い。

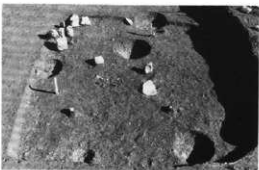
3号住居跡 平面形は直径約5mの円形の住居跡である。掘り込みは北側の壁が30cm、南側は15cmほどでそれほど深くはない。周溝らしき溝状のものが北壁際にあるが全周はしない。ピットは10基検出されたが、この中で柱穴は6基であると思われ、出入口はやや柱間の広い南側であると推定される。炉は住居跡のほぼ中央に位置し、円形の石囲炉で長径14～15cmの石を11個使っている。火床面は焼土がほとんどなかったため赤く焼けた面は検出されなかった。床面は、やや鍋底状に中央部が低く石囲炉周辺が特に堅い床であるほか、中央部ほど堅く貼り床されているが、壁際になるほど軟弱な床になる。



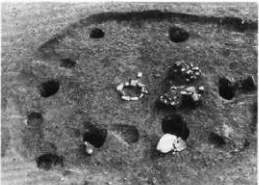
第32図 調査区全景



第33図 1号住居跡カマド



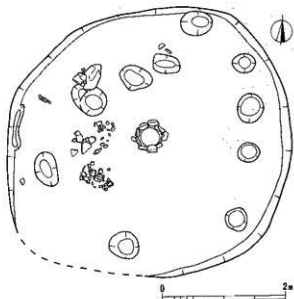
第34図 2号住居跡



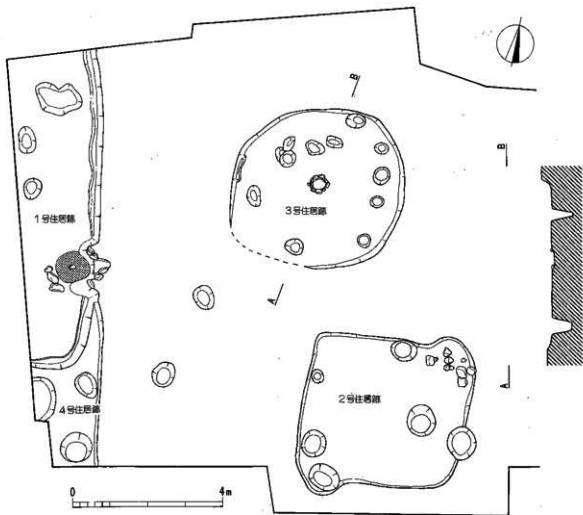
第35図 3号住居跡

7. 出土した遺物 縄文土器6 (顔面把手付深鉢形土器1) 土師器環3 土師器甕1 須恵器環2 円面硯片3 打製石斧2 鉄滓2 骨片1 石皿2 砥石1 土器片石片2箱

表土剥ぎの時点で土師器須恵器片が多く、耕作土から円面硯破片が3点出土した。残念ながらこれ以外に円面硯破片は発見されず、住居跡の中からも破片は無く器形を復原するまでには至らなかった。1号住居跡の出土遺物は、カマドに近いこともあり、点数的には多くの遺物があったが、床面より高い位置からの出土が多く、また破片ばかりで復原できるものは少ない。須恵器環、甕破片が多く窯と思われる破片も少量であるが出土した。2号住居跡からは、土師器環がカマドの西側にあるピットの脇から出土した。ほかには砥石の出土



第36図 3号住居跡平面図(1:60)



第37図 下片岡町地籍遺構全体図(1:100)

があったが、残念ながら研いだであろうと思われる刀子などの鉄製品は出土しなかった。出土した縄文土器の中で1個体は浅鉢で3号住居跡から外れて出土しているため屋外のものか、他に住居跡が重複しているものか不明である。3号住居跡は縄文時代中期中葉の住居跡で5個体の縄文土器が出土した。出土地点は住居跡の北西側に集中している。床面には一括土器とともに石皿が床に置かれた状態で出土している。ほかの一括土器も2個体重なっているものもある。その中の1個体が顔面把手付深鉢形土器で、内側を向いた顔面把手が上を向いた状態で他の土器と重なって出土した。残念ながら顔面は畑の耕作により砕けてしまったようであるが、この顔面に向かい合うように、反対側の胴部には蛇が土器をよじ登り、口縁部に頭が出ている状態の文様が施されている。



第38図 顔面把手付深鉢形土器出土状態



第39図 上1号住居跡須恵器杯高さ4cm
下2号住居跡出土土器高さ5.5cm



第40図 3号住居跡出土土器 高さ25・27.5・20cm



第41図 顔面把手付深鉢形土器高さ39.5cm



